

ギャラリートーク(展示解説)を開催し、来館者の皆様に展示への理解をより一層深めていただく機会を設けました。当館では初めての試みでしたが、「気軽に参加できるイベント」を目指し、今後も継続して参りたいと思います。



無料配布の図録

特別展の様子

### 平成28年度特別展報告

二月二日(水)から二月八日(日)まで、佐佐木信綱記念館では特別展「わが上人―西行へのあこがれ―」を開催しました。幼い頃から父親の影響で「山家集」を愛読し、西行を強く憧憬した信綱は、校訂や資料紹介など様々な活動を通じて西行研究の普及に努めました。その敬慕は晩年にまで及び、自身の遺詠の中にも西行を登場させるほどでした。信綱のこうした西行への思いを紹介するべく企画した本特別展は、信綱ファンのみならず多くの西行ファンの皆様からもご好評をいただきました。普段とは異なる客層呼び込む良い機会となったのではないかと思います。期間中の二月二六日(土)と二月一〇日(土)には、学芸員による三〇〜四〇分程度の「わが上人―西行へのあこがれ―」を開催し、来館者の皆様に展示への理解をより一層深めていただく機会を設けました。当館では初めての試みでしたが、「気軽に参加できるイベント」を目指し、今後も継続して参りたいと思います。

## 佐佐木信綱

### 記念館だより

第31号

---

#### 目次

- ・平成28年度特別展報告
- ・新資料の紹介
- ・ミニ展示「信綱の肖像」
- ・収蔵庫より
- ・文化財課ホームページ開設のお知らせ

### 文化財課ホームページ開設のお知らせ

文化財課では、平成二八年二月に新ホームページ「鈴鹿市文化財ガイド」を開設いたしました。文化財課所管施設の最新展示情報のほか、市内指定文化財の紹介や街道マップの無料配布なども行っています。またパソコンのみでなく、スマートフォンからも閲覧が可能となっております。ぜひご活用下さい。



「鈴鹿市文化財ガイド」トップ画面

**販売物のご案内**

『佐佐木信綱とふるさと鈴鹿』  
発行：鈴鹿市教育委員会  
¥1,000

『加越日記』  
著者：佐々木弘綱  
発行：竹柏会出版部  
¥1,200

その他販売物は信綱顕彰会 HPへ  
<http://karutamichi.info/>

---

**お詫びと訂正**

前号(30号)の記載内容に誤りがありました。お詫びして訂正いたします。

P3「新資料の紹介」 翻字  
○をしてみても × なしえて

---

**発行・編集**

鈴鹿市  
文化スポーツ部 文化財課  
(鈴鹿市神戸一丁目18-18)  
TEL 059-382-9031  
FAX 059-382-9071

<http://suzuka-bunka.jp/>

鈴鹿市文化財ガイド

## ご利用案内

三重県鈴鹿市石薬師町に拠点を構える佐佐木信綱記念館は、明治・大正・昭和期の偉人として地元でも親しまれてきた佐佐木信綱(明治5―昭和38、歌人・国文学者)の遺功を称えるべく、昭和45年に鈴鹿市が設置した展示施設です。もとは「信綱生家」を拠点として開館しましたが、昭和61年に「信綱資料館」が併設されて以降、こちらを中心に展示活動が行われてきました。佐々木家がかつて書庫として使用した「土蔵」や、信綱が還暦を自祝して寄贈した「石薬師文庫閲覧所」なども隣接し、いずれも一般公開を行っています。

かつての愛用品や、少年期の短冊、ペンネームの由来である名刺、唱歌「夏は来ぬ」の歌詞がしたためられた色紙など、数々の収蔵品を常時展示するほか、毎年秋頃には特別展も開催し、市内外への魅力発信に努めています。

## 佐佐木信綱記念館

鈴鹿市石薬師町 1707-3 TEL&FAX 059-374-3140

**開館時間** 9:00 ~ 16:30

**休館日** 毎週月曜、第3火曜(休日の場合は開館、翌日休館) 年末年始

**アクセス** 近鉄鈴鹿市駅からC-バス乗車 佐佐木信綱記念館下車 徒歩2分  
東名阪自動車道 鈴鹿ICから車で約20分

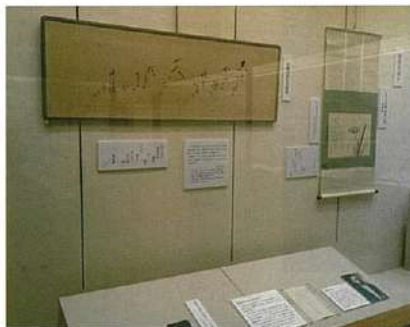
## 新資料の紹介

特別展期間中は八〇〇名を超える方々にお越しいただき、記念館は大いに賑わいました。ご協力をいただきました皆様、誠にありがとうございました。

とある演題で、祖父・二衛や母・照子と信綱との交流のほか、ご自身が記憶されている信綱との思い出についてもお話いただきました。生前の信綱と交流を持った数少ない人物であり、参加された方々はそのお話に興味深く聞き入っていました。

特別展期間中は八〇〇名を超える方々にお越しいただき、記念館は大いに賑わいました。ご協力をいただきました皆様、誠にありがとうございました。

今年度も多くの方々のご厚意により多数のご寄贈を賜りました。書籍、書簡、歌額、掛軸をはじめ、生前に信綱と交流を持った方々の遺品など、興味深い資料が満載です。現在展示室では新資料紹介コーナーを設け、これらの寄贈品の内から数点を公開しています。いずれも信綱の新たな一面を知るものとして非常に有意義な資料です。ぜひご覧下さい。



新資料紹介コーナー(展示室一角)

寄贈月	寄贈資料	点数	寄贈者
5月	信綱関連書籍	18	神奈川県 個人
8月	歌詞原稿(複写)	2	荻野町 個人
9月	貼り交ぜ帳	1	大坂府 個人
10月	幸綱直筆歌額	1	鈴鹿市 個人
10月	信綱直筆歌額	1	兵庫県 個人
11月	信綱書簡	4	四日市市 個人
11月	信綱関連書籍等	4	鳥取県 個人

寄贈品一覧(平成28年4月~平成29年3月現在)

今年度も多くの方々のご厚意により多数のご寄贈を賜りました。書籍、書簡、歌額、掛軸をはじめ、生前に信綱と交流を持った方々の遺品など、興味深い資料が満載です。現在展示室では新資料紹介コーナーを設け、これらの寄贈品の内から数点を公開しています。いずれも信綱の新たな一面を知るものとして非常に有意義な資料です。ぜひご覧下さい。

和子さんの思い出

平成二八年五月、信綱晩年の地・熱海へご出身の奥津和子様より、信綱関連資料を多数ご寄贈いただきました。奥津様は、ご両親の使いで信綱宅を何度か訪れたことがあるとのこと。ここでは、寄贈の際にご執筆いただいた興味深いエピソードの中から、信綱にまつわるものを抜粋して紹介いたします。

「信綱さん」との出会い 私は熱海の出身である。両親は熱海にお住いの文化人たちの交流があった。そのおひとり、国文学者で歌人の佐佐木信綱さんのところには私がよく使いで行っていた。\*おばあさまは若いころ信綱さんとお知り合いだったとかで、お会いしたいといわれ、母が手はずを整え、おばあさまを西山の信綱宅へ案内した。戻ってきたおばあさまは信綱さんとお話ができて、とてもたのしかったとよろこんでいた。帰られたあと、母が笑いながら「先生(信綱さんのこと)とおばあさまとの会話、とてもついていけなかったわ。だって鹿鳴館の話なのよ」と。おばあさまも信綱さんも鹿鳴館に出入りしていた紳士淑女だったのである。

※おばあさま 物理学者・田中館愛橘の長女。奥津氏はその孫にあたる人物と同時であったことから「おばあさま」と交流を持った。

お使いを通じての交流 西山の信綱邸にお使いに行くようになったのはいつからだろう。物腰もお話しぶりも優しい方だった。いつも和服を召していられた。何う度に先生は、「万葉集が〇〇語に翻訳されましたよ」と嬉しそうにお話されていた。私が語学が好きなことを覚えていくくださったからである。そして帰りにはいつもご本を下された。今回寄贈をした多くはそのとき頂いたものである。大学るとき、「田中館博士がローマ字で書いて

信綱一首31

秋深きタベ鈴鹿嶺を指ざしつ、西上人の歌をしへましき

昭和三八年(一九六三)、父・弘綱の神前祭にて詠まれたもの。兼題は「秋夕」。「西上人」とは西行を指す。父は、生家の裏に広がる鈴鹿山脈の景色を指差しながら、西行の「鈴鹿山うきよをよそにふり捨てていかにゆくわが身なるらむ」の歌を高らかに朗詠してみせたという。最晩年に至って父とともにあった幼少時代を回想するとき、そこには西行の歌があった。

ミニ展示「信綱の肖像」

「ご本人の和歌ですよ」と折り本を頂いた覚えはあるが、どこかに紛れ込んでしまったらしくそれを見当たらない。先生からの手紙は、能筆なうえに、万葉仮名で書かれていたのでほとんど読めなかった、でも、いつも横にカナがふつてあったのを覚えている。先生が亡くなって、西山のお宅でのお別れには、父がすでに病に臥せていたので、私が代わりにお別れに行った。神を供えた記憶がある。



文化勲章を受けて (左:竹柏会大会にて、右:中国にて)

当記念館所蔵の資料の内、年間を通して外部からの利用申請が最も多いのが「写真」です。中でも文化勲章を佩用した信綱の写真は、博物館施設、新聞、雑誌、テレビなど様々な媒体で頻繁に用いられており、佐佐木信綱という人物を端的に説明する上では欠かすことのできない資料として、当館の広告塔的な役割を担う一枚となっております。そこで今回は、そうした肖像写真の中から普段はあまり表に出る機会のないものにスポットを当て、ミニ展示コーナーを作成しました。勲章を佩用した姿に見慣れた私達の目には新鮮に映るものも多く、信綱に対する新たな印象をもたらしてくれます。

収蔵庫より ツーショット特集

様々な活動を通じ幅広い人脈を得た信綱。ここでは、友人や門下生、師らと共に写るツーショット写真を用いながら、彼らとの交流の一端に迫ります。文章を読むだけでは伝わらない、写真ならではの臨場感をお楽しみ下さい。

徳富蘇峰(左) 撮影時期/昭和二六年三月一七日、撮影場所/晩晴草堂



徳富蘇峰は、明治・大正・昭和の三代にわたって活躍した評論家、歴史家です。徳富家は、信綱の妻・雪子の実家である藤島家の姻戚にあたります。信綱と雪子の結婚を後押ししたのは蘇峰である、とは信綱の長男・逸人によるエピソードです。写真は、蘇峰が晩年を過ごした熱海の邸宅「晩晴草堂」にて昭和二六年(一九五二)に撮影されたもので、左端には蘇峰の直筆で「蘇叟八十九」と署名があります。蘇峰が手にしているのはこの年刊行された信綱の歌集『山と水と』でしょうか。にこやかな表情から、二人の間で交わされた様々な会話が想像できる一枚です。

三浦守治(右) 撮影時期/推定明治二〇年代、撮影場所/玉翠館



大正期の病理学者で、帝大医科大学の初代病理学教授を務めた三浦。明治一四年(一八八二)に東京大学医学部を首席で卒業し、同期には森鷗外がいます。研究の傍ら信綱のもとで歌を学び、「自分も少し歌を学ばなかったならば、自分の学者的生命は早く枯渇したかも知りがたい」と語ったといいますが、その言葉通り研究・作歌の両道において優れた才能を発揮しました。

木村正辞(右) 撮影時期/推定明治四三年五月、撮影場所/木村邸



明治期の国学界で活躍した木村正辞は、早くから万葉学に着目し、その研究の基礎を築き上げた人物です。信綱は自著『明治大正昭和の人々』(新樹社、一九六一)の中で「自分が万葉集を一生の研究題目としたことは、まったく先生の学恩である」と述べ、その影響の大きさを綴ると同時に、木村を父に並ぶ生涯の師と位置づけています。写真は、東京市下谷区入谷にある木村の邸宅で撮影されたもの。明治四三年(一九一〇)五月、水野家の土蔵から元暦校本万葉集を発見した信綱がその顛末を報告すべく木村のもとを訪れた時のものと考えられますが、詳細は不明です。

新村出(右) 撮影時期/昭和三〇年五月二六日、撮影場所/京都ホテル



言語学者である新村出は、『広辞苑』の編者としてもよく知られています。新村が明治四二年(一九〇九)に信綱を訪ねたことを機に、二人は五〇年来の親交を結びました。新村は竹柏会には直接属さなかったものの、信綱の影響で歌をよくしました。また十代の頃から『日本歌学全書』(佐々木弘綱・信綱編、博文館、一八九〇・一八九一)を購読するなど、国文研究においても信綱の学恩を受けたといえます。昭和三〇年(一九五五)五月に京都を旅した信綱は、二六日に新村の自宅を訪れており、同日京都ホテルで開催された竹柏会京都支部歌会にも顔を出しています。写真は歌会での様子を撮影したもので、同席した新村とは隣席であったことがわかります。